



勝野 雅央・ 名古屋大学 医学部長 (大学院医学系研究科長) 創基155年 インタビュー

名古屋大学が今年、創基155年を迎えた。医学部の前身、仮医学校が設置されて1世紀半を越え、発展を続けつつ医療界に多くの実績を残してきた。医療技術の進化、少子高齢化など社会環境が激変する中、地域をリードする高度医療機関としての信頼感は絶大だ。卓越した医学の教育研究拠点として今、どこを目指しているのか。勝野雅央・名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長に歴史に根差した医学部の現在と将来展望などを聞いた。

譲れぬ理念は 「最先端医学研究による新たな医療技術の創出」

—今年が創基155年目です。歴史上特筆すべき点は。

勝野雅央・名古屋大学医学部長 1871（明治5）年5月に藩校が設置されましたが、始まりは天然痘のワクチンを打つ場所、いわばワクチンクリニックで、仮医学校としてスタートしました。歴史上、様々な変革はありましたが、あえて言えば2つ挙げられると思います。1つは1939（昭和14）年、医学部と理工学部の2学部で名古屋帝国大学が発足し、病院は医学部附属病院と改称されました。歴史の大きな転換点でした。もう1つは2020年に岐阜大学と東海国立大学機構に法人統合して1機構2法人の形になったことです。これは困難なこともありました。少子高齢化で今後学生も減る中で大学として勇気をもって切り込みました。

—医療による地域貢献の歴史でもありました。

勝野医学部長 藩校の設置には名古屋出身

の植物学者で医学者の伊藤圭介さん（1803-1901）が尽力されました。最後の帝国大学として名古屋大学が発足した背景には、名古屋市民や地元財界による長年の強い熱望と、愛知県による巨額の寄附が大きかったと言われており、地域・市民が作った大学とも言えます。地域の人の健康を守ることが医学部の核にあり、地域に根差しつつ新時代に対応、世の中の役に立つ



医系研究棟、左から1号館・2号館・3号館

形で進んできたのが大学の155年ではではなかったかと思います。

—医学部の理念、4項目における重点は。

勝野医学部長 人類の幸福に貢献する医学研究者や医療人を育成する、なども理念に掲げられ、4つとも大事ですが、やはり、「先端的医学研究を進め、新たな医療技術を創成する」との理念は譲れませんね。多くのミッションの中でも名古屋大学として研究開発により医学を歩を進歩させることは最も重点を置くべきことだと思っています。

—最近の研究成果、難治性疾患の治療法開発について。

勝野医学部長 大きく捉えると、医学部の強みはがんと神経の分野で、これまでの多くの成果を上げてきています。心臓、糖尿病なども強みですが、がんと神経の研究では新しい診断法や治療法の開発を進めています。例を挙げると、核酸医薬があります。簡単に言うと、人工的な遺伝子を作り、病気の原因となる遺伝子を治す薬です。人工的な核酸がつながった分子を作り、薬として注射すると、人間本来の遺伝子にくっついて悪い遺伝子の作用を抑えたり、弱い遺伝子を強めたりする技術です。がんや神経難病で核酸薬を使用する研究が今、着実に進んでいます。具体的には、胃がんと脳腫瘍で核酸薬の治療が始まりました。

—データサイエンス分野の成果について。

勝野医学部長 研究の深い内容までは触れられませんが、この分野では本田直樹教授が研究をけん引しています。教授の専門はデータ駆動生物学で、従来の生物学は「タバコは肺がんの

原因になる」など仮説を立て、実験で証明していく仮説検証型でした。しかし、AI（人工知能）が多くのデータから様々な方法で解析できるようになったため、仮説がない状態でデータから何が言えるのかを導き出すことができるようになりました。人々の血液や遺伝子のデータから導き出すデータ駆動型の研究で大きな研究分野に成長しました。例えば、病気は軽症から重症へと進みますが、この研究で、その進み方はシンプルではなく、多様なパターンがあることが分かってきました。精神や脳の分野にも力を入れており、人が考え、意思決定する思考過程をデータで明らかにする研究も進められています。

また、名古屋市東区の大幸キャンパスに看護師や放射線技師、リハビリ療法士などメディカルスタッフを育成している保健学科があり、ここでもデータサイエンス分野で、ゲノム、遺伝子、脳の回路などを研究しています。疾患の予防や介護などの分野でデータから真実を見出していく時代になっていますね。

—東海国立大学機構の創薬シーズ開発・育成研究教育拠点、糖鎖生命コア研究拠点などの現状は。

勝野医学部長 機構ができて6年目ですが、お互いの強みを持ち寄る効果があり、両者の研究者が一緒に研究、共同開発を進めています。若手研究者の視野が広がりますし、創薬ももちろんですが、特に糖鎖生命コア研究拠点などでは連携の大きな成果が出てきていますね。

—メディカルイノベーション推進室の役割と展開例を。



名古屋大学医学部東側入口



研究室



名古屋大学附属図書館
医学部分館 館内

勝野医学部長 大学がクリニックから始まったように、人々の役に立つ学問というのが医学部の根底にあります。創薬にしろ、レントゲンの開発にしても社会実装に近い学問なのです。医学の成果が明日からの私たちの生活に関わるわけで、実用化が非常に重要です。創薬などはアカデミアだけではできず、産業界と連携していますし、スタートアップで資金を獲得して大企業にライセンスアウトするといったビジネスにキャリアアップしていく。これがメディカルイノベーション推進室の目指すところで、8月には、次世代の臨床開発モデルの構築に向けて、名古屋大学はグローバル企業の武田薬品工業（本社・大阪市）との連携協定を締結しました。大学の卓越した医学研究基盤と武田薬品の臨床開発の知見を融合し、中部圏の医療機関ネットワークとも連携して推進したいと考えています。創薬ビジネスは海外が先行することが多く、日本は中国の後塵を拝する事態になっており、薬が国内に入っていない、ドラッグロスの危機感があります。連携による研究や知見、運営のノウハウを活用可能な仕組みに発展させて国際競争力を高めていきます。

―教育方針、学生気質について。

勝野医学部長 大学の人材育成のスローガンに「勇気ある知識人」を育てよう、というものがあります。勇気をもって新しいことに取り組み、良くないものは変えていこうという呼びかけです。東海国立大学機構への統合もそうですし、学生の研究を含めて勇気が求められる場面があります。「自由闊達」の学風のもと、学生

は自由にいろいろな意見を言うことができます。アンケートを行い、学生が教員を評価し、卒業生にも自分が受けた教育をどう思うか聞いています。ただ、学生には多様性が少ない感じもしています。優秀な学生が多い反面、規格外といえますか、枠を超える学生が少なく、寂しい面がなくはないですね。やはり、視野を広げ、医学以外の分野、例えばリベラルアーツなど文系も勉強できるシステムになっているので、勇気をもってキャパシティを広げていってほしいですね。

―特色ある教育プログラムについて。

勝野医学部長 教育の1つの特色として、医学部6年間の修業年限のうち、3年生の後半、6カ月間をすべて研究に充てさせています。学生が選択して研究室に入り、インターン的な研究員として勉強します。多くは医学部の研究室に所属しますが、愛知県がんセンターなどで研究する学生もいます。研究に力を入れているのは、診療においても臨床研究を進めることがあり、新しい医療機器や薬の開発にも研究が重要だからです。

―A I、ロボティクス医療の導入と今後について。

勝野医学部長 7月に医学部にA I推進室を作りました。いろんな役割がありますが、A Iを活用した研究を活性化する司令塔となる組織です。A Iを使って書類作業などの業務を効率化する目標もあります。5年、10年先は読めないところもありますが、A Iの能力はどの分野でも人間に近づいてきて、答えを出してき



鶴舞キャンパス



名古屋大学医学部附属病院外来棟

ますね。これからは、この患者さんにはこの薬を使うべきなどと言うA Iの意見を参考にしながら診療することが普通になってくると思います。しかし、全て鵜呑みにする訳にはいきません。データサイエンスを駆使しながら最終的には人間が判断する必要があります。A Iだけで完結する世界があるとしても、判断や決定プロセスの中に人間が必ず介入する、ヒューマンインザループという考えが原則だと思います。

―地域連携への考え方、実践例を。

勝野医学部長 医療においては新しい地域医療構想があり、病院のあり方も変わってくると思っています。本学は名古屋だけに限らず、愛知、岐阜、三重、静岡の医療圏に医師を派遣していますので、広域連携のあり方を自治体とも相談しながら進めていくことが大事だと思っています。本学と岐阜大学は各医学部長と病院長は非常に密に連携し、意見交換しています。地域でのコミュニケーションをこれからも大切にしていきたいですね。

本学はIT大手のグーグルと連携に合意して、協力関係を築きました。災害医療への対応における先端的取り組みとなります。災害時にはまず、トリアージ（治療の優先順位の判別）が必要ですが、その場でデータを瞬時に集め、解析して指示するのは難しいですね。そこで、今、どういう医療が必要なのか、どこに医師などを送るべきか、などデータを見える化して、指揮命令系統をしっかりとさせるための連携です。グーグルがデータ解析のインフラを手伝ってくれて、災害時に集まったデータで意思決定をしていくシステムを作る計画です。恐らく、

世界初の試みで、国や自治体も絡んでくる大きな事業で、社会実装して、地域に貢献するとともに、グローバル展開の契機になれば、と考えています。

―附属病院のヒヤリ・ハットの取り組みについて。

勝野医学部長 ミスをした人が悪いという話ではなく、医師を含めて人がやることなので、ミスは起こります。問題は間違えた時にどう考えて次には起こらないようにするか、です。小さな現場のところから病院長まで各階層で包み隠さず報告して吟味して、その後に生かすことが大事です。医療界が変わり、対応はすでに浸透しており、私は一つの文化になったと思っています。

―座右の銘を教えてください。

勝野医学部長 「人々が科学技術は自然に向上していると考えているのは間違いだ。自然に改善されることはない。科学の進歩は、多くの人が（力を合わせて）必死に働いた時にしか実現しない。放置すればそれは劣化する」。

イーロン・マスクの言葉ですが、科学の進歩のためには「work very hard to make it better」と彼は述べています。その通りだと思いますね。

―ありがとうございました。



勝野 雅央（かつの・まさひさ） 1971年2月、名古屋市生まれ。95年名古屋大学医学部卒、名古屋第二赤十字病院研修医。2003年名古屋大学大学院医学系研究科修了（医学博士）。12年同研究科神経内科学准教授、15年同教授、21年同臨床研究教育学教授、22年名古屋大学脳と心の研究センター長（25年4月まで）。25年4月、名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長に就任。2014年日本神経学会賞、20年文部科学大臣表彰（科学技術分野研究部門）。